

実践報告

教育連携事業成果報告会並びに研究協議会実践報告

Practical report of Educational Collaboration Program Result Briefing Session and Research Conference

大野勝生

Katsuo Ohno

Abstract

武蔵丘短期大学（以下「本学」とする）では、平成 24 年 7 月、本学初となる高大連携協定を埼玉県立寄居城北高等学校と締結した。その後、平成 26 年 12 月に埼玉県立秩父農工科学高等学校、平成 29 年 7 月に埼玉県立北本高等学校、同年 12 月に本庄第一高等学校、平成 30 年 2 月に埼玉県立小川高等学校と協定を締結し、現在、県内高等学校 5 校と高大連携協定を締結している。特に上記 5 校については、高校側からの依頼を受け、本学の各専門分野の教員が生徒への出張講義や実技指導等を行ったり、高校生の本学授業や体験実習への参加、PTA 保護者の方々の調理実習等への受入れなど定期的に行っている。これは、高校生が本学教員の講義を受けたり、授業や実習に参加し、より高いレベルの教育を体験することで、進学意識の醸成につながるとともに、広く本学の知名度を高めることもねらいの一つであり、ひいては学生募集にも大きく貢献しているところである。

そこで本学では、高等学校側が求める連携の在り方を深く検討し、双方にとって長期にわたり有益なものとするべく、平成 29 年度より、埼玉県内公私立の高等学校の校長先生方にお集まりいただき、特色ある高大連携事業を実践している高等学校の事例発表をもとに、今後の高大連携事業の在り方、課題等について校長先生方と本学教員との研究協議会を開催している。ここでは、平成 29 年度第 1 回、平成 30 年度第 2 回の教育連携事業成果報告会並びに研究協議会の実践報告をする。

キーワード：高大連携、出前授業、単位互換制度、地元密着、学生募集

I はじめに

1999 年 12 月の中央教育審議会答申『初等中等教育と高等教育との接続の改善について』が示されて以来、「高大連携」に関しては全国各地で様々な取り組みが行われている。一口に高大連携と言っても、その連携の目的・形態・内容等は様々であり、特定の定義はないと思われるが、しいて言えば「高等学校と大学とが協働して行う教育活動」と言えるだろうか。

長く高等学校教育の現場に身を置いてきた者として当時を振り返ると、校長として多くの大学・短大と連携を図り、日々の教育活動に生かしてきた。まさに高校側からすれば、実にメリットの多い取り組みであった。

では、立場を変え大学・短大側にとってのメリットとは何であろうか。

1990 年代初頭に約 200 万人だった 18 歳人口は、2008 年に 120 万人まで減り続け、近年は小康状態であるが、2018 年を境に再び減少に転じている。全国私立大学の約 4 割が定員割れしている現状の中、

大学生の東京への一極集中もあって本学にとっても学生確保は喫緊の課題である。

そこでまず考えられるのが学生確保に係る高大連携の有効性である。

大学・短大教員が高等学校にて出前授業・講演や実技指導を行う。また、高校生が大学・短大の授業に参加し、より高いレベルの教育を体験することで大学・短大への進学意識が醸成されるなど、早期に大学・短大の情報を提供する機会が拡大でき、高大連携は学生確保において、広報・PR の観点からも有効な手段の一つととらえることができる。

このことから、本学においても、高大連携が学生確保に有効な手段であることを十二分に認識しながらも、将来を見通して高校側が求める連携の方法・内容等を深く検討し、双方にとって長期にわたり有益なものとするべく工夫・研究を継続する必要がある。そこで、本学との連携協定締結校並びに進学者のある関係高等学校の中から、特色ある高大連携に積極的に取り組まれている校長先生方に、自校の取

り組みの概要、連携の成果等について事例発表していただき、参加された高等学校間で成果・課題等を共有するとともに、本学が進める高大連携事業に係る課題を見出し、今後の高大連携の在り方の一助とするべく本協議会を開催する次第である。

Ⅱ 第1回教育連携事業並びに研究協議会概要

1 次第

- (1) 開 会
- (2) あいさつ
学校法人後藤学園 武蔵丘短期大学 学 長 川合 武司
学校法人後藤学園 理 事 長 後藤 人基
- (3) 学校法人本部・短大教職員紹介
- (4) 本学の概要説明、地域連携・高大連携の現状について
武蔵丘短期大学健康スポーツ専攻 特任教授 大野 勝生
- (5) 高大連携事業成果報告
ア 埼玉県立北本高等学校長 高橋 和弘
「地域の要望を踏まえた信頼ある学校づくり～KISEP と高大連携事業」
イ 埼玉県立ふじみ野高等学校長 大川 勝
「地域に元気・感動・夢を発信する学校づくり～高大連携事業を通じて」
ウ 埼玉県立児玉高等学校長 武藤 正
「児玉高校の高大連携事業への取組み」
《休 憩》
- (6) 研究協議
○高大連携事業の現状と課題
○大学と高等学校におけるこれからの教育連携の在り方
- (7) 指導講評 文部科学省高等教育局大学振興課 短期大学係 係 長 齊藤 正信 氏
- (8) 事務連絡
- (9) 閉 会

2 出席者 ※次頁参照

3 本学の概要説明、地域連携・高大連携の現状

健康スポーツ専攻特任教授 大野勝生

- (1) 本学の概要
 - ・1991年（平成3年）4月 開学
 - ・2005年（平成17年）4月
健康生活科を健康生活学科に改称
健康・栄養専攻を健康栄養専攻に改称
健康・体育専攻を健康スポーツ専攻に改称
 - ・2012年（平成24年）
健康マネジメント専攻を新設
- (2) 教育目標
本学は、人格教育、専門知識の習得、社会への貢献の基本理念のもと、次の目標達成を図る。
 - ・礼節を尊び、教養と情操豊かな人格を備えた人間性の養成
 - ・広い視野、深い思考力、豊かな表現力の養成
- (3) 3専攻と各コース
 - 《健康栄養専攻》
 - ・健康食育コース
食育について学び、栄養教諭や保育園・幼稚園などの栄養士を目指す。
 - ・スポーツ栄養コース
スポーツ栄養を学び、スポーツ施設で働く栄養士を目指す。
 - ・フードマネジメントコース
食品について幅広く学び、食品会社や事務所給食などの専門家を目指す。
 - ・健康福祉コース
病院や福祉・介護施設等で働く栄養士を目指す。

第1回教育連携事業成果報告会並びに研究協議会出席者一覧

	学 校 名	職 名	氏 名	備 考
1	埼玉県立北本高等学校	校 長	高 橋 和 弘	発表者①
2	埼玉県立ふじみ野高等学校	校 長	大 川 勝	発表者②
3	埼玉県立児玉高等学校	校 長	武 藤 正	発表者③
4	埼玉県立上尾南高等学校	校 長	中 山 達 朗	
5	埼玉県立浦和北高等学校	校 長	伊 藤 治 也	
6	埼玉県立大宮武蔵野高等学校	校 長	明 戸 一 浩	
7	埼玉県立桶川高等学校	校 長	谷 部 貴 一	
8	埼玉県立桶川西高等学校	校 長	北 川 裕	(代) 教頭 榎本 貴一
9	埼玉県立小川高等学校	校 長	石 川 秀 雄	
10	埼玉県立越生高等学校	校 長	松 本 英 夫	
11	埼玉県立川越初雁高等学校	校 長	田 島 公 樹	(代) 教頭 森田 健
12	埼玉県立川越総合高等学校	校 長	葦 塚 光 信	(代) 教頭 吉野 安昭
13	埼玉県川越市立川越高等学校	校 長	関 俊 秀	(代) 教頭 松本 康二
14	埼玉県立熊谷工業高等学校	校 長	猪 野 敏 夫	
15	埼玉県立鴻巣高等学校	校 長	峰 稔 浩	
16	埼玉県立鴻巣女子高等学校	校 長	石 川 薫	
17	埼玉県立坂戸西高等学校	校 長	大 野 好 司	
18	埼玉県立特別支援学校坂戸ろう学園	校 長	池 田 宏	
19	埼玉県立狭山経済高等学校	校 長	黒 沢 敬	
20	埼玉県立狭山清陵高等学校	校 長	高 橋 泰 綱	
21	埼玉県立志木高等学校	校 長	山 本 健 敬	
22	埼玉県立秩父高等学校	校 長	浅 海 純 一	(代) 教頭 安藤 龍嗣
23	埼玉県立秩父農工科学高等学校	校 長	加 藤 秀 昭	
24	埼玉県立鶴ヶ島清風高等学校	校 長	松 谷 卓	
25	埼玉県立新座柳瀬高等学校	校 長	高 橋 厚 裕	(代) 教頭 井上 輝也
26	埼玉県立蓮田松韻高等学校	校 長	増 淵 則 敏	
27	埼玉県立飯能南高等学校	校 長	町 田 邦 弘	
28	埼玉県立深谷高等学校	校 長	新 井 均	
29	埼玉県立深谷商業高等学校	校 長	山 田 典 男	(代) 教頭 松本 憲一
30	埼玉県立深谷第一高等学校	校 長	小 野 澤 範 久	
31	埼玉県立吹上秋桜高等学校	校 長	永 井 一 博	
32	埼玉県立本庄高等学校	校 長	森 一 夫	(代) 教頭 高野 庸夫
33	埼玉県立松山女子高等学校	校 長	榎 本 克 哉	
34	埼玉県立皆野高等学校	校 長	青 木 孝 夫	
35	埼玉県立寄居城北高等学校	校 長	田 中 洋 安	(代) 参与 片山 利明
36	埼玉県立鷲宮高等学校	校 長	金 子 益 巳	
37	埼玉県私立浦和学院高等学校	校 長	石 原 正 規	(代) 教頭 三上 幸子
38	埼玉県私立本庄第一中学校高等学校	校 長	相 川 浩 一	(代) 教頭 山浦 秀一
39	埼玉県私立武蔵越生高等学校	校 長	大 塚 英 男	(代) 教頭 一川 智宏
40	埼玉県私立叡明高等学校	校 長	笹 本 隆 悦	
1	文部科学省高等教育局大学振興課短期大学係	係 長	齊 藤 正 信	
2	学校法人秋草学園秋草短期大学事務部	部 長 代 理	秋 草 康 司	
1	学校法人後藤学園	理 事 長	後 藤 人 基	
2	武蔵丘短期大学	学 長	川 合 武 司	
3	学校法人後藤学園	理 事	中 村 昌 次	
4	学校法人後藤学園	総 務 部 長	上 村 紀 夫	
5	学校法人後藤学園	広 報 部 長	神 原 晃	
6	武蔵丘短期大学健康スポーツ専攻	教 授	玉 木 啓 一	副学長
7	武蔵丘短期大学健康マネジメント専攻	教 授	太 田 あ や 子	地域連携推進委員会委員長
8	武蔵丘短期大学健康栄養専攻	教 授	高 橋 勇 一	事務局長
9	武蔵丘短期大学健康スポーツ専攻	特 任 教 授	大 野 勝 生	地域連携・教育推進センター長
10	武蔵丘短期大学事務局	総 務 課 長	小 川 晃 子	
11	武蔵丘短期大学同窓会	会 長	深 山 英 孝	

- ・健康ビューティーコース
エステティックサロンなどで活躍する栄養士を目指す。

《健康スポーツ専攻》

- ・スポーツ教育コース
教育とスポーツについて学び、中学校保健体育教員を目指す。
- ・サッカー・フットサルコース
サッカー・フットサルプレイヤーとしてのパフォーマンス向上と未来のコーチを目指す。
- ・スポーツトレーナーコース
日本スポーツ協会公認資格取得を目指し、より幅広い分野で通用する専門性を身に付ける。
- ・健康&スポーツコース

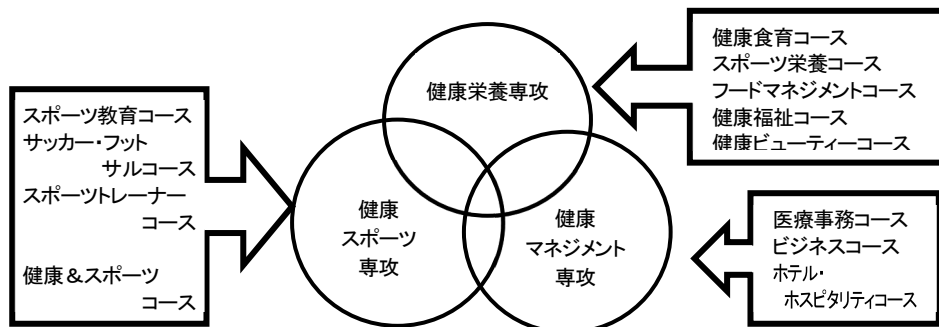
安全で効果的な健康づくり運動を提供するインストラクターを目指す。

《健康マネジメント専攻》

- ・医療事務コース
医療施設や薬局での事務職や受け付けなどの窓口業務を担当できる人材を目指す。
- ・ビジネスコース
一般企業のビジネスゾーンや公務員（一般職・消防士・警察官・自衛官など）として活躍できる人材を目指す。
- ・ホテル・ホスピタリティコース

(平成30年度新設)

お客様を笑顔にするホテルやレストランなどのサービス業で活躍できる人材を目指す。



4 本学の特徴と地域連携・高大連携事業の現状

本学は「栄養科学と運動スポーツの融合のもと、社会に広く貢献できる人材の育成」を目指し、平成3年に建学。健康生活学科を全国に先駆け初めて設置し「健康」をキーワードに「栄養」「スポーツ」「マネジメント」の3専攻を有する1学年定員200名、男女共学の短期大学である。健康栄養士6名、健康運動士3名、スポーツ指導者3名、公認サッカーコーチ2名公認アスレティックトレーナー1名の有資格教員を含め、24名の教員を有する。

また、大学スポーツ界では短期大学ながら、インカレにつながる部活動も盛んで、女子サッカー部(愛称:シエンシア)はインカレ準優勝3回、3位3回、2016年度は4位と毎年上位入賞を果たし、‘なでしこジャパン’に選出される選手を輩出するなど、多くの卒業生がなでしこリーグ等で活躍している。また、女子バレーボール部、女子バスケットボール部は関東大学リーグ3部にそれぞれ所属、4年制大学に伍して上位で健闘している。

開学以来、高等教育機関として栄養士、中学校保健体育教員をはじめとする実践的な指導者を養成し社会へ送り出すことが、本学の開学から現在、そし

て将来に向かっての不変の使命である。しかしながら、近年、時代の変化は激しく、社会構造の変容、学生気質の変化などを鑑み、教育手法の転換期にあることも確かであり、こうした使命を全うするために、地域社会とのより親密な連携の必要性が特に高まっている。

5 地域連携・高大連携の現状

(1) 地域連携協定

ア 平成20年5月15日

吉見町と武蔵丘短期大学との地域連携協力に関する協定書締結

イ 平成24年5月28日

東松山市と武蔵丘短期大学との相互連携に関する協定書締結

ウ 平成28年1月13日

滑川町と武蔵丘短期大学との相互連携協力に関する協定書締結

エ 平成29年6月2日

吉見町と武蔵丘短期大学と B&G 財団との地域連携協力に関する協定書締結

オ 平成30年2月15日

武蔵丘短期大学とボーイスカウト東松山第一団

との相互連携に関する協定書締結

カ 平成 31 年 1 月 21 日

鳩山町と武蔵丘短期大学との地域連携に関する基本協定書締結

キ 令和元年 7 月 10 日

北本市と株式会社イナホスポーツと武蔵丘短期大学による包括連携協定書締結

(2) 高大連携協定

ア 平成 24 年 7 月 13 日

埼玉県立寄居城北高等学校と武蔵丘短期大学との高大連携協力に関する協定書締結

イ 平成 26 年 12 月 4 日

埼玉県立秩父農工科学高等学校と武蔵丘短期大学との高大連携協力に関する協定書締結

ウ 平成 29 年 7 月 10 日

埼玉県立北本高等学校と武蔵丘短期大学との高大連携協力に関する協定書締結

エ 平成 29 年 9 月 29 日

私立本庄第一中学校・高等学校と武蔵丘短期大学との高大連携協力に関する協定書締結

オ 平成 30 年 2 月 9 日

埼玉県立小川高等学校と武蔵丘短期大学との高大連携協力に関する協定書締結

(3) NPO 法人武蔵丘スポーツクラブ事業概況

ア 吉見町受託事業

○吉見町健康体力測定（一般介護予防事業）

○ウォーキング教室

○吉見町夏休みプール教室

○鉄棒、跳び箱教室

○かけっこ教室

○トレーニング教室

○ちびっこ運動遊び教室

○子育て応援事業

【料理教室】

・本当の出汁の味を知ろう！

・クリスマスケーキ作り

・親子クッキング

【運動遊び教室】

・運動遊び（鉄棒、マット運動）

・親子で挑戦（運動能力テストと体づくり運動）

・運動遊び（親子ヨガ）

イ 東松山市受託事業

○保育園運動遊び

○保育所プール教室

○こどもプール教室

○まちなかりノベーションプロジェクト

中心市街地活性化事業～若者がチャレンジす

る「たまり場」つくり～

ウ 武蔵丘短期大学自主事業

○シエンシア女子サッカー教室

○健康ヨガ教室

○骨盤ストレッチ教室

○健康ゴルフ教室

○ハンドボールクリニック

○ノルディックウォーキングイベント

○骨元気アップ教室

(4) 平成 28 年度地域連携事業の実績

ア 吉見町関係

○こどもまつりでお菓子販売

○けやき保育園食育指導

○健康料理教室（会席膳作り）

○一人暮らし高齢者栄養指導

○町広報誌ミニコラム連載

○うまいもんフェア健康弁当販売

○国保健康教室（栄養指導・健康弁当提供）

○支援センター親子クッキング

○子育て支援教室

○けやき保育所クリスマスケーキ作り

○親子わくわく体験カヌー教室

○健康体力測定（年 5 回）

イ 東松山市関係

○きらめき市民大学講師派遣（3 回）

○「いなほてらす」オープンキッチン運営

○「ピュアホワイト」推進試食イベント運営

○東松山ペレーニア FC 食育指導

○日本スリーデーマーチ短大ブース参加

ウ 川島町関係

○スポ少保護者対象食育講座

○健康筋力アップ教室、栄養講座

○ムサタン Kitchen Day 開催

○丸ごと健康プロデュースイベント参加

○町民向け英会話教室（12 回）

○珈琲講座

エ 埼玉県関係

○いきがい大学講座

○彩の国プラティナキッズ発掘育成プログラム講師派遣

オ その他

○関東ブロックワークアクション講師派遣

○大崎電気ハンドボール親子教室

(5) 東京オリンピック・パラリンピック特待生制度の提唱

ア 目的：アスリートのセカンドキャリア支援

イ 内容：入学金、学費免除

ウ 運用：2021年入学から、毎年10名程度を定員
エ 「小さな大学の小さな親切」

日本全国の大学とともに支援の輪を広げたい

6 地域連携・高大連携の成果と将来ビジョン

(1) 成果—地域において大学の存在感、輝きを如何に放てるか。

ア 地域連携活動、各種イベントへの教員・学生の参画により地域での大学認知度の向上

イ 学生のボランティア意識、社会参画意識の向上

ウ 学生の持つ「明るさ・元気・エネルギー」が地域へ好影響、期待感の高揚

エ 参加した学生の、自分が社会で活躍できたという達成感の高揚

オ 高大連携により、高校教員、生徒への大学認知度の向上 ⇒ 学生募集

(2) 将来ビジョン

ア 地域連携から学生が学ぶ～地域社会での実習科目の充実と地域で学ぶ体制の強化

イ 地域のニーズと本学のシーズをマッチさせた「健康の発信拠点」としての役割

ウ 平成27年度「健康生活研究所」設立

本学の資源（物的・人的・技術的）を活用した健康生活を実現させるための研究と実践

エ 短大全体でのシステマティックな対応への変化「地域連携・教育推進センター」の設立

○地域社会との連携に関する事項

○地域の諸団体との連携に関する事項

○大学、高等学校等の連携に関する事項

○公開講座をはじめとする生涯学習に関する事項

オ 浸透させたい大学のイメージ

○地域と歩み、健康を実現する武蔵丘短期大学

○若さで地域を元気にする武蔵丘短期大学

○スポーツで夢を与える武蔵丘短期大学

地域連携・高大連携を含む本学のブランド化をより一層推進し、地元吉見町を発信拠点に県内外へ連携事業の広報・拡大を図る。特に、

連携事業における学生の活躍の様子、参加者の生き生きとした表情などを積極的に動画配信するなど、イメージの浸透を図っていく。

7 高大連携事業成果報告

(1) 埼玉県立北本高等学校長 高橋 和弘「地域の要望を踏まえた信頼ある学校づくり～KISEP と高大連携事業」



学校紹介	
□ 昭和50年創立	43年目の全日制普通科
□ クラス編制	1学年・2学年 5クラス6展開 3学年 5クラス 計17クラス
□ 生徒数	1学年 198名 2学年 192名 3学年 169名 計559名

目指す学校像	
□ 目指す学校像	「生徒・保護者・地域からの期待に応え、生徒の力を伸ばす学校」
□ 語り継がれたコンセプト	「夢」「挑戦」「感動」
□ 頑張っていることが認められる学校	基礎学力の伸長、体験学習、部活動の活性化、ボランティア活動の推進、社会性の醸成

本日の内容	
視点①	地域に根ざす学校づくり
視点②	高校と大学の教育連携



地域に根ざす学校づくり① KISEP

□ KISEP (北本市小・中・高相互交流事業)
Kitamoto Inter School Exchange Program

生徒や保護者・地域等の要望を踏まえ、信頼される学校づくりを推進するため、北本市内の小学校・中学校・高等学校が授業公開や出前授業や部活動の合同練習会等を通じて、児童・生徒の交流をはじめ、学校間の交流推進、教職員の指導力、資質向上、部活動の相互活性化を図る。

- ・北本市教育委員会との共催の事業... 昨年度より
- ・武蔵丘短期大学との連携... 今年度より
- ・市内中学校(4中学校)から約35%の生徒

地域に根ざす学校づくり(中丸小学校)

「あいさつ運動」「学びあい」(中丸小学校)

- ・朝の挨拶と、登校時の小学生の安全を見守ります。
- ・朝の運動から放課後までの間、担任の先生の補助として授業へ参加したり、休み時間等において小学生とのふれあい活動を行います。

KISEPの成果について(中丸小学校)

中丸小学校から見た北本高校の変化

□ 高校生を認識する

- ・顔が見えないからこそ感じる怖さの解消
- ・年齢の近いお兄さん・お姉さんの優しさ
- ・先生方の認識の変化
- ・高校生の一生懸命やっている姿への共感

□ 高校に小学生が足を踏み入れる

- ・音楽交流会での小学生の発表
- ・高校生のために毎日練習する

KISEPの成果について(中丸小学校)

中丸小学校の教育成果

□ 小学生の能力を伸ばす

- ・市内小学校陸上競技大会での好成績
- ・陸上競技部の指導で、走りが飛躍的に変化
- ・書く文字の変化
- ・書道部の指導で、「文字」と「余白」を意識
- ・見せる「書」への変貌

□ 高校が小学校の研修の場となる

- ・高校の公開授業に小学校の先生方が参加

KISEPの成果について(生徒の変化)

北本高校の生徒の変化

□ 地域と共に歩む

- ・生徒のコミュニケーション能力の向上
- ・生きる力の育成
- ・人を思う心の醸成

□ 自分を見つめ直す

- ・リーダー的存在でなかった生徒の変貌
- ・人と関わる、そして人に語る

□ 自信をつける

地域に根ざす学校づくり(市内中学校)

「授業公開」「出前授業」「部活動の合同練習会」(市内4中学校)

- ・教職員の指導力・資質向上
- ・部活動の相互活性化

生徒の交流をはじめ、学校間の交流を推進する。

KISEPの成果について(市内中学校)

高校が新風を吹き込む

□ 中学校へ新しい教授法を伝授する

- ・協調学習の実践
- ・出前授業でアクティブラーニング
- ・ジグソー法の研修の講師派遣(予定)
- ・新教材の実験的授業
- ・中央ゴールサッカー、2ボールバスケット
- ・世界の音楽(民族楽器演奏家とのTT)

□ 中学校が研修の場となる

- ・出前授業で新しい風を吹き込む
- ・市教委指導主事を交えての反省会

KISEPの成果について(市内中学校)

- 顔の見える交流を
- 中学校の先生方が高校の公開授業に参加する
 - ・高校での協調学習を見学
 - 同時に全てのクラスの参観を！
 - 卒業生の授業中の様子
 - 安心する、そして感心する
 - ・部活動の合同練習
 - 部活動の相互活性化
 - 専門の指導者のいない部活動の悩み
 - 高校を身近に感じてもらう
 - ・もっと顔の見える交流を

地域に根ざす学校づくり② K-CAP

- K-CAP (北本高校地域活動事業)
 - Kitamoto High School Community Activity Program
- 北本市唯一の高校として、地域との交流や保護者との連携を深め、地域に貢献し愛される学校として活動している。地域からの期待に応えるため、様々な事業に積極的に活動している。
- ・北本市、北本市社会福祉協議会、北本市観光協会、北本駅、警察署、消防署、小学校、中学校、地元FMラジオ局、市民文化祭、地元祭り 等 各種

地域に根ざす学校づくり④ K-CAP

- 地域とともに ～数え切れないほどの行事の参加～
- 北本市まちづくりキャラバン、かんちゃわナイト、まちごよみ、北本あきんど市、北本市市民文化祭、Neoサマーフェスタ、北本市スポーツフェスティバル、海外日本語教師交流会、駅ロータリーゴミ拾い、530プロジェクト、KISEP、菊まつり、未成年喫煙防止キャンペーン、北本市総合文化祭、交通安全キャンペーン、キッズアドベンチャー、福祉施設青春メッセージ、振り込め詐欺防止キャンペーン など
他多数

K-CAPの成果について

- 高校生が変わる
- 地域に支えられている意識
 - ・学校では会えないことのない人との交流
 - ・誰かのために何かをしている人との出会い
 - ・体験は視野を広げる
 - 北高生は、見られているという意識
 - ・人は一人では生きていけない
 - ・責任ある行動の重要性の気づき
 - ・終わった後の充実感(感謝は、行動の原動力)

高校と大学の教育連携について

高校と大学の教育連携について

- 相互の教育交流
- 生徒の視野を広げる
 - ・大学の特化された知識・技能
 - ・生徒の進路に対する意識と学習意欲の向上
 - ・体験は視野を広げる
 - 教員の指導力向上
 - ・高校教員・大学教員の有意な教育情報の場
 - ・FD(ファカルティ・ディベロプメント)
 - 大学教員の教育能力向上の実践的方法
 - 教育支援ツールの開発へ
 - 教育の裾野の広がりを

高校と大学の教育連携について

- 北本高校と武蔵丘短期大学の教育連携
 - 相互の信頼関係に基づき、教育機能についての連携
 - ① 高校からの教育連携授業等への受け入れ
 - ② 高校からの要望による
 - 大学教員の出前授業・講演
 - 大学施設・設備の利用
 - ③ 教育についての情報交換・交流
 - ④ その他、双方が協議し、同意した事項
- 高校教育・大学教育の活性化を図る目的である

今年度の連携事業について

- | | |
|-----------------------------------|--|
| 健康生活学科
健康スポーツ専攻

山村 伸准教授 | 悩み(メンタル面の指導)
練習では良いのに
試合になるとどうしても力を出せない
山村准教授による
男子バスケットボール部への助言
心理テストによる分析
結果目標とプロセス目標の設定
・顧問との部ノート交換に活用 |
|-----------------------------------|--|

今年度の連携事業について

- 健康生活学科
健康スポーツ
専攻
- 山村 伸
准教授
- 緊張の水準
 - 低水準(注意散漫・集中力低下)
やる気がしない
 - 高水準(興奮・緊張)
あがり・力み
 - ↓
 - 最適水準(ゾーン)を見つける
- ※ 県北大会準優勝・県北予選3位

今年度の連携事業について

- 健康生活学科
健康栄養専攻
- 島野 優子
准教授
- 悩み(子どもとのコミュニケーション)
保護者からの相談
最近、子どもの元気がない
会話をあまりしていない
 - 島野准教授による講義・実習
親とをつなぐ
コミュニケーションツール「お弁当」講座

今年度の連携事業について

- 健康生活学科
健康栄養専攻
- 島野 優子
准教授
- 「お弁当」でコミュニケーション
お弁当で勇気づける
褒めてあげる
早く・安く・栄養価のある
そして感動のある「お弁当」
- 12月15日(金)に予定
保護者・生徒・教職員の参加

高校と大学の教育連携について

- 高校生が大学の教育研究に触れる機会
特定分野に高い能力と強い意欲を持つ生徒に
強い刺激を与えることができる
- 生徒一人一人の能力を伸ばすための連携
継続的に実施することにより、高校の日々の
教育活動にその成果をフィードバックできる
- 高等学校教員と大学教員の情報交換
専門領域を持つ大学の強みを生かす
高大の指導内容・方法・体制の違いを留意
生徒の能力・意欲の把握が不可欠

まとめにかえて

まとめにかえて

- 多様な体験活動と学習機会の充実
 - ・地域の実態に応じた多様な学習機会の提供や
交流事業を実施する。
- 共生社会の理解
 - ・自ら選択した行動の結果には、社会的責任が
伴うことについての理解を図る。
- 生徒のつながり
 - 地域に根ざす学校づくりの取り組みの中で、生
徒同士のつながり・一体感が生まれ、そして絆が
生まれる



(2) 埼玉県立ふじみ野高等学校長 大川 勝

「地域に元気・感動・夢を発信する学校づくり」



FUJIMINO Senior High School since 2013

■ 概要

平成25年開校(5年目)

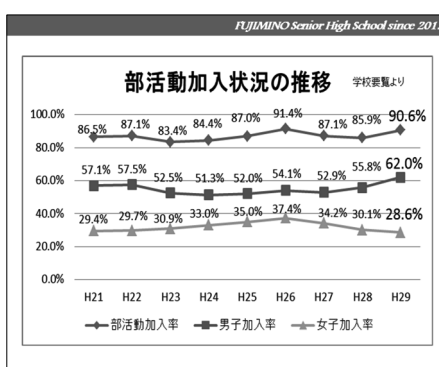
科	普通科	SS科
募集定員	160名	80名
学級数	5	2
1学級人数	32名	40名

FUJIMINO Senior High School since 2013

【目指す学校像】

学習とスポーツ・文化活動を両立し

地域に元気・感動・夢を発信する学校



FUJIMINO Senior High School since 2013

部活動実績

【国際大会】

平成26年

中国・南寧世界選手権 体操競技
石倉あづみ 女子団体8位

韓国・仁川アジア大会 体操競技
石倉あづみ 女子団体銅メダル
女子個人総合6位、平均台4位

FUJIMINO Senior High School since 2013

部活動実績

【平成26年度インターハイ】

体操競技(女子団体総合優勝・個人総合優勝)
陸上競技(男子110m障害)

【平成26年度選抜大会】

体操競技(女子種目別:段違い平行棒6位)

【平成27年度インターハイ】

陸上競技(男子110m障害2名・砲丸投げ)
体操競技(女子個人総合)
水泳部(女子50m自由形)

FUJIMINO Senior High School since 2013

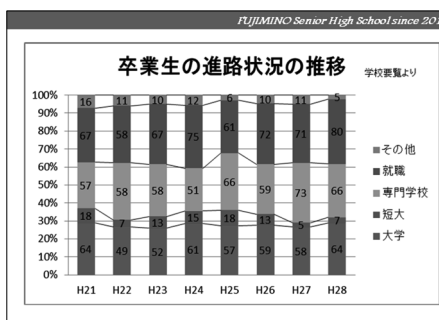
部活動実績

【平成28年度インターハイ】

体操競技(女子個人総合10位)
陸上競技(男子110m障害・走り幅跳び)

【平成28年度選抜大会】

体操競技(女子個人総合7位)
柔道(女子63kg級)



FUJIMINO Senior High School since 2013

【連携講座】

1	スポーツ障害について
2	フードマイレージ
3	子どもの運動遊びから身体を考えてみる
4	環境カードゲームでエコを学ぼう
5	介護福祉の技術を学ぶ～ シーツ交換 ～
6	心と体の関係性を楽しく学ぶ！
7	こころの不思議を体験しよう！



FUJIMINO Senior High School since 2013

3 文京学院大学との連携②

【幼稚園実習】

教科「子どもの発達と保育」

【実習内容】

- ◆子どもと一緒に遊ぶ。
- ◆子どもの援助をする。



FUJIMINO Senior High School since 2013

3 文京学院大学との連携③

【ふじみ野市アートフェスタ参加等】

生徒会の生徒が
学生実行委員として
文京学院大学の学生と一緒に
運営に携わった。

- ◆手話ダンスの披露
(振付に手話を撮り入れたダンス)



FUJIMINO Senior High School since 2013

4 東京柔道整復専門学校との連携

スポーツサイエンス科 1年生
「スポーツ概論」の実習

- ◆テーピングの理論と実技



(3) 埼玉県立児玉高等学校長 武藤 正 「児玉高校の高大連携事業への取り組み」



学校紹介(笑顔いっぱい！児玉高校)

- 本校は、室町中期に築城された「雉岡城（別名八幡山城）」二の丸、三の郭跡に位置し、今年で創立96年目を迎え、卒業生の数は、約23,000名を数える伝統校です。
- 特徴
 - ・体育コースを設置
 - ・充実した施設
 - ・緻密なキャリア教育

進路DATEBASE2016

【就職先】
 シェリエ タツムテクノロジー
 キャン/コンボ-ネット フレックス 市光工業
 ジョイスワズ 富士機工 どりーむ
 本庄総合病院 など

【進学先】
 <主な大学・短大>
 駿河台大学 埼玉工業大学 立正大学
 平成国際大学 上武大学 関東学園大学
 桐蔭横浜大学 大東文化大学
 埼玉女子短期大学 など
 <主な専門・各種学校>
 大原学園高崎校 アルスコンピュータ専門学校
 大泉保育専門学校 埼玉県栄養専門学校
 日本美容専門学校 中央情報管理専門学校高崎校
 埼玉県立熊谷高等技術専門学校
 本庄児玉看護専門学校 文化服装学院
 東洋美術学校 など

体育コースを設置 (平成4年度より)

昭和48年、サッカー部高校総体全国優勝
 <平成19年度～平成29年度>

- 柔道部男子 全国大会出場5回
 関東大会出場11回
- 柔道部女子 全国大会出場8回
 関東大会出場16回

平成23年度 卒新井千鶴70kg級世界チャンピオン

- バスケットボール部女子
 全国大会出場8回
 関東大会出場7回

充実した施設

- 体育施設
- 校舎内

緻密なキャリア教育

- 5日間の就労体験

近隣の41事業所に協力を得た。

学校法人香川栄養学園 女子栄養大学と 連携教育協定を締結(1927年11月)

5つの連携取組

- ① 大学における特別講義
- ② 出張授業
- ③ 大学のオープンキャンパスへの参加
- ④ 学校説明会
- ⑤ 児玉高校での教育実習の実施

スポーツ栄養学の講演会 H28.4.7

4月7日(木)の午後、女子栄養大学との高大連携協定の一環として管理栄養士の東千恵子先生をお招きし、「競技力アップのための"食"～体脂肪率減少を目指して～」という演目でご講演をいただきました。
 今回の講演会は女子部員を対象としていたため、教員のほかに柔道部、女子バスケットボール部、陸上部、サッカー部マネージャーなど31名の生徒も参加しました。

保護者向け講演会 H28.5.14



PTA総会にあわせて女子栄養大学から講師をお招きし、保護者の方々対象の講演会を行いました。女子栄養大学から進路アドバイザーの染谷忠彦先生に「高校生(思春期)をもつ保護者の皆様へ～進路選択の後方支援と食事による健康管理～」という演題でご講演をいただきました。

大学見学会 H28.12.10



12月10日(土)に見学会を行い、PTA・後援会、同窓会、保護者の方々が参加しました。本年度、新たに四年制と短大の指定校推薦の枠を頂いた食文化栄養学科の卒業論文の発表会への参加や大学の施設見学、そして有名な「ヘルシーランチ」を大学食堂でいただきました。女子栄養大学、栄養学についての理解を深めるとても有意義な1日となりました。

本年度の取組

平成29年5月13日(土)
講演会を実施
「高校生を持つ
保護者の皆様へ」



大学と高校との交流

- 大学から高校への提供
 - 特別講義の受講・出張授業・学校説明会
 - オープンキャンパスへの参加・指定校推薦枠
- 高校から大学への提供
 - 教育実習生の受け入れ
- 今後の交流内容(考えていること)
 - 相互の授業見学研究(主体的・対話的で深い学び)
 - 共同事業(商品開発・ボランティア等)
 - 地域イベントへの共同参加

課題とまとめ

<課題>
◆連携校との距離
◆生徒の進路希望を考慮

<まとめ>
・「高大接続改革・主体的・対話的で深い学び(AL)の視点を取り入れた授業改善・次期学習指導要領実施に向けた準備」等、高校や大学に大きな変化が求められている。今後は、一つの学校単独でいろいろと地域と関係を持つ時代ではない。小・中・高・大が連携して、生徒・教員・保護者・地域社会へと情報発信していく時代である。

8 研究協議の概要

(1) 高大連携事業成果報告に対する質疑

○大野校長(坂戸西高)

「本校でも2つの大学と連携協定を結んで様々な取り組みを行っている。昨今は教員の長時間労働が問題となり、教員の働き方改革などが議論されているところでもあり、学校現場では高大連携実施に当たって「時間がかかる」「余計なこと」などの声も少なからずある。それぞれの学校では担当する委員会、係などはあるのか。」

○高橋校長(北本高)

「本校では、各教科代表からなる KISEP 委員会があり、市教委担当と連絡調整を図り、小・

中学校との交流事業を行っている。今回、武蔵丘短期大学との連携協定が成立し事業を実施したが、教頭が窓口となった。今後は KISEP 委員会を窓口で連携を図っていきたい。」

○大川校長(ふじみ野高)

「大学との連携は、主にスポーツサイエンス科が窓口となる。地元ふじみ野市との連携関係もあり、今後整理していきたい。こうした取り組みに関しては、活気ある学校づくりの意欲が不可欠。連携を締結すれば一つの形が出来るので、校内のマンパワーで何とか出来るが、どこの高校でもというわけにはいかないだろう。特に高校側に適切な人材の配置が必要である。」

○武藤校長(児玉高)

「本校は教員数も多くないので、すべて教頭が窓口となっている。女子栄養大との連携事業は単発の事業なので、今後、継続性のある事業内容を計画していきたい。」

(2) 高大連携事業の課題

○石川校長（鴻巣女子高）

「本校は、普通科・家政科学科・保育科と3学科ある。20年以上前から、その道のプロの方々に出前授業等で指導していただいている。年間計画に位置付け、各学科の教員が担当するという意識が出来上がっている。生徒の進学意識の醸成、専門的な深い学び、知識の醸成、専門的な深い学び、最先端の知識・技術の習得、また、教員の指導力向上、意識改革に大きな効果がある。今後は、管理職マターだが、高大共にメリットのある新しい事業に取り組んでいきたい。」

○大野（武蔵丘短期大学）

「本学では、高校との連携協定は学長マターであった。平成29年度、新たに地域連携・教育推進センターを立ち上げ、専門に担当する部署とした。連携高校からの要望に応じて、担当教員にお願いしているが、各々授業の合間をぬってのことなので、負担を十分考慮していかなければならない。課題は同様にある。」

○一川教頭（武蔵越生高）

「運動部、文化部を問わず、活動が活発である。特に運動部員のための健康管理、身体の使い方、栄養管理の向上をにらんで、女子栄養大と連携協定を締結した。また、東洋大学陸上競技部との連携を予定しているが、細部についてはこれから詰める。各運動部ごとに大学と連絡調整を図っている。」

○山浦教頭（本庄第一中・高）

「本校では従来、市の青年会議所を窓口として、地域の行事等に参加してきた。大学等との連携は初の試みとして、今回、武蔵丘短期大学と中・高含めて協定を結んだ。現在は教頭が窓口として外部と連絡を取り合っている状況。貴学との連携に関しては、何ができるか、現在校内で鋭意検討している。栄養・食育・運動トレーニングなどの関心が高く、受験に勝つ食育、アスリートのための食育研修会等、教員やPTAも参加できるものを企画したい。運動部単位での練習試合などの交流・連携、特に女子サッカー部の交流を是非お願いしたい。」



○大野（武蔵丘短期大学）

「本学の女子サッカー部は短大ながら毎年インカレ上位で活躍している。選手も全国各地の強豪高校から集まっている。また、プレミアリーグのアーセナル女子と提携しており、毎年、ロンドン遠征も実施している。高校女子サッカー部との交流は大歓迎である。」

(3) これからの高大連携の在り方について

○石川校長（小川高）

「高大連携に期待するところは大きい。講師派遣や出前授業などもさることながら、高校生に対しての講座の開講、単位互換制に係る連携を図れないものか。専門性の高い知識習得、大学進学意識の醸成にもつながり、大学進学時に修得単位が生かせれば高校生にとっても意義は大きい。是非、検討していただきたい。」

○川合学長（武蔵丘短期大学）

「大変貴重なご意見を聞かせていただいた。大学は他大学間との単位互換制度は有る。高等学校との単位互換制の可能性について、本学としても前向きに検討する。」

○猪野校長（熊谷工業高）

「埼玉県では‘彩の国アカデミー事業’がある。浦和地区の高校では、埼玉大学との単位互換を実施している。」



9 指導講評

文部科学省高等教育局大学振興課

短期大学係長 齊藤 正信 氏

本日は、このような研究協議会にお招きいただきありがとうございました。埼玉県内公立高校3校の校長先生方から高大連携の成果報告に係る貴重な発表を拝聴することができました。このような協議会は大変意義深く、これからの高大連携、高大接続について理解を深めていく上で貴重な機会であると認識しておりますので、今後、是非2回、3回と継続して開催されることを強く望んでおります。

私は現在、文部科学省大学振興課で短期大学を担当しておりますので、少しその現状についてお話しさせていただきます。

短期大学は、現在全国で339校ございますが、平成8年のピーク時には598校ございました。少子化の影響や、4年制大学への志向の高まりから、4年大へ改組する短大が増え、短大の数は年々減少しております。では「短大の役割は終わった？」のかと言えば、私はそうは思っておりません。短期大学の良さや、アピールすべきところはたくさんございます。例えば、2年間で専門的な資格が取得できるほか、小規模の特長を生かしてクラス担任制やゼミ形式の指導により、学生一人一人にきめ細かな指導が行われており、4大と比較して退学率が低くなっております。また、卒業後は専門性を生かしたところに就職していることはもちろん、4年制大学への編

入学や専攻科への進学等、多様な学びも確保されております。

高校生の大学への地元進学率を見てみますと、4年制大では約4割ですが、短大は約7割と非常に高く、地元密着であることがよくわかります。今後、18歳人口がますます減少し、大学・短大にとって学生確保は厳しい状況にあるかとは思いますが、しっかり特色を打ち出しているところに学生は集まっております。

高等学校の校長先生方が集まり、高大連携の意義を語り合うこのような協議会は大変意義深いものであると思いますので、今後の広がりに大いに期待するところでございます。

どうか高等学校の学校現場でも、地元密着できめ細かい指導が行われており、密度の濃い充実した学生生活を過ごせる短大につきまして、進路指導の選択肢に積極的に加えていただければ幸いです。

本日はありがとうございました。



Ⅲ 第2回教育連携成果報告会並びに研究協議会概要

1 次第

(1) 開 会

(2) あいさつ
学校法人後藤学園 武蔵丘短期大学 学 長 川合 武司
学校法人後藤学園 理 事 長 後藤 人基

(3) 学校法人本部・短大教職員紹介

(4) 高大連携事業成果報告

ア 埼玉県立小川高等学校長 葦塚 雄一

「WIN・WINを目指す学校と地域の連携～小川高校『ふるさと創生プログラム』の取り組み～」

イ 埼玉県本庄第一高等学校教頭 山浦 秀一 「地域に愛される学校を目指して」

《休 憩》

(5) 研究協議

メインテーマ～高大連携に期待すること～

(6) 指導講評 文部科学省高等教育局大学振興課 課長補佐(併) 公立大学専門官 八島 崇 氏

(7) 閉 会

2 出席者 ※次頁参照

第2回教育連携事業成果報告会、研究協議会出席者一覧

NO	学 校 名	職 名	氏 名	備 考
1	埼玉県立上尾橘高等学校	校 長	鈴 木 健	
2	埼玉県立上尾南高等学校	校 長	橋 本 淳	
3	埼玉県立伊奈学園総合高等学校	校 長	遠 藤 修 平	(代) 副校長 関 正一
4	埼玉県立入間向陽高等学校	校 長	菅 野 義 彦	
5	埼玉県立岩槻商業高等学校	校 長	須 藤 崇 夫	(代) 教 頭 中 山 望
6	埼玉県立浦和商業高等学校	校 長	梶 寛 治	
7	さいたま市立浦和南高等学校	校 長	加 藤 浩	
8	学校法人大妻学院大妻嵐山高等学校	校 長	真 下 峯 子	
9	埼玉県立大宮東高等学校	校 長	加賀谷 貴彦	(代) 教 頭 小曾戸克巳
10	埼玉県立小鹿野高等学校	校 長	南 清 孝	
11	埼玉県立小川高等学校 (連携協定校)	校 長	韭 塚 雄 一	発表者①
12	埼玉県立桶川高等学校	校 長	矢 部 貴 一	(代) 教 頭 神田 剛広
13	埼玉県立越生高等学校	校 長	松 本 英 夫	(代) 教 頭 長峰 竜一
14	埼玉県立川口青陵高等学校	校 長	新 井 和 徳	
15	川越市立川越高等学校	校 長	関 俊 秀	(代) 教 頭 坂下 幹弘
16	埼玉県立川越総合高等学校	校 長	梅 澤 仁	
17	埼玉県立川越初雁高等学校	校 長	田 島 公 樹	
18	埼玉県立北本高等学校 (連携協定校)	校 長	島 崎 育 夫	(代) 教 頭 中 山 厚志
19	埼玉県立久喜北陽高等学校	校 長	小 林 伸 子	
20	埼玉県立熊谷工業高等学校	校 長	猪 野 敏 夫	
21	埼玉県立熊谷商業高等学校	校 長	橋 本 準 一	
22	埼玉県立越谷東高等学校	校 長	奥 木 幹 夫	
23	埼玉県立児玉高等学校	校 長	武 藤 正	
24	埼玉県立坂戸西高等学校	校 長	大 塚 教 雄	(代) 教 頭 江森 幸夫
25	埼玉県立狭山清陵高等学校	校 長	高 橋 泰 綱	
26	埼玉県立狭山緑陽高等学校	校 長	井 原 章	(代) 副校長 久住 毅
27	埼玉県立庄和高等学校	校 長	林 昭 雄	
28	学校法人文理佐藤学園西武学園文理高等学校	校 長	猪 狩 誠 市	(代) 2年担 土屋 進一
29	埼玉県立草加東高等学校	校 長	坂 井 修 義	
30	埼玉県立秩父高等学校	校 長	浅 海 純 一	
31	学校法人東京成徳学園東京成徳深谷高等学校	校 長	神 田 正	
32	埼玉県立豊岡高等学校	校 長	鈴 木 雅 士	(代) 教 頭 黒沢 拓也
33	埼玉県立滑川総合高等学校	校 長	高 柳 壽 男	
34	埼玉県立新座総合技術高等学校	校 長	宮 敦 子	
35	埼玉県立新座柳瀬高等学校	校 長	高 橋 厚 裕	

36	埼玉県立蓮田松韻高等学校	校長	増 淵 則 敏	
37	埼玉県立飯能高等学校	校長	岩 澤 正 明	
38	埼玉県立飯能南高等学校	校長	町 田 邦 弘	
39	埼玉県立深谷高等学校	校長	新 井 均	
40	埼玉県立深谷商業高等学校	校長	峰 稔 浩	
41	埼玉県立深谷第一高等学校	校長	小野澤 範 久	(代) 参与 関根俊彦
42	埼玉県立ふじみ野高等学校	校長	品 川 秀 人	
43	埼玉県立本庄高等学校	校長	森 一 夫	(代) 教頭 赤沼勝美
44	学校法人塩原学園本庄第一高等学校 (連携協定校)	校長	山 城 寿 男	
45	学校法人塩原学園本庄第一高等学校 (連携協定校)	教 頭	山 浦 秀 一	発表者②
46	埼玉県立三郷北高等学校	校長	小野塚 邦 彦	
47	学校法人越生学園武蔵越生高等学校	校長	大 塚 英 男	
48	学校法人山村学園山村学園高等学校	校長	平 野 正 美	
49	埼玉県立寄居城北高等学校 (連携協定校)	校長	高 野 庸 夫	

1	文部科学省高等教育局大学振興課	課長補佐	八 島 崇	指導講評
---	-----------------	------	-------	-------------

1	学校法人秋草学園秋草学園短期大学	学 長	北 野 大	
2	学校法人秋草学園秋草学園短期大学	事務部長	秋 草 康 司	
3	学校法人秋草学園秋草学園短期大学	理 事	野 中 博 史	
4	学校法人純真学園埼玉純真短期大学こども学科	特任准教授	平 井 厚 志	
5	小鹿野町総合政策課 地域おこし協力隊		本 奈代子	

1	学校法人後藤学園	理 事 長	後 藤 人 基	
2	学校法人後藤学園 武蔵丘短期大学	学 長	川 合 武 司	
3	学校法人後藤学園	顧 問	中 村 昌 次	武蔵丘短期大学客員教授
4	学校法人後藤学園	事務局長	上 村 紀 夫	
5	学校法人後藤学園	広報部長	神 原 晃	
6	武蔵丘短期大学 健康スポーツ専攻	教 授	玉 木 啓 一	副学長
7	武蔵丘短期大学 健康栄養専攻	教 授	茗 荷 尚 史	健康栄養専攻長
8	武蔵丘短期大学 健康スポーツ専攻	教 授	杉 山 仁 志	健康スポーツ専攻長
9	武蔵丘短期大学 健康マネジメント専攻	教 授	太 田 あや子	健康マネジメント専攻長
10	武蔵丘短期大学	教 授	高 橋 勇 一	短大事務局長
11	武蔵丘短期大学 健康スポーツ専攻	教 授	大 野 勝 生	地域連携・教育推進センター長

3 高大連携成果報告

(1) WIN・WIN を目指す学校と地域の連携

小川高校「ふるさと創生プロジェクト」の取組み

埼玉県立小川高等学校長 荻塚雄一

はじめに ー取り組みの背景ー

- ・生徒募集の推移、小川町の地域性

ふるさと創生プロジェクト

1 基本的な考え方

- ・これまでの取り組みの発展的継承
- ・地域の発展なくして学校の発展もない→学校と地域の連携を通じて学校も地域も活性化させたい
- ・学ぶ、発信する(提案する)、つなぐ(つながる)→プロジェクトを通じて、地域の発展を担う人材を育成する

2 小川町との連携ー包括連携協定の締結

《今年度の主な取り組み》

- ・第70回小川七夕まつり司会運営補助
(放送部)
- ・『来て！観て！食べて』小川町食の魅力PR事業
(生活美学部、放送部)
- ・小川和紙フェスティバル作品展示
(書道部)
- ・小川和紙マラソン大会運営補助
(放送部、陸上競技部、バレー部、剣道部)
- ・青パトによる振り込め詐欺被害防止活動
(放送部)
- ・駅・通学路周辺清掃 (野球部、バレー部)

3 小中学校、施設等との連携

- ・小川小学校との交流事業(希望者有志30名ほど)、櫛台中学校合唱祭へ向けた指導
(音楽部)
- ・櫛台中学校立志式へ向けた発声指導
(放送部)
- ・旧上野台中学校体育館の使用、施設での出前

発表会

(音楽部)

- ・埼玉県立嵐山史跡の博物館でのボランティアティーチャー派遣

(希望者有志5名ほど)

4 大学・短大との連携

- ・武蔵丘短期大学との連携協定の締結(健康生活学科 長島洋介先生による講演会)
- ・東洋大学理工学部との連携協定の締結
(2 学年進学選抜クラスの生徒による大学見学)
- ・立教大学コミュニティ福祉学部 空閑教授のゼミ生との交流、小川町木呂子地区をフィールドに「中山間地域ふるさと事業調査研究」、竹沢地区「ふるさと支援隊」事業
- ・新潟大学農学部 栗生田忠雄先生による進学選抜クラスを対象とした講演会

5 総合的な学習の時間を活用した学び

- ・「くらしと科学」講座(小川和紙の歴史、和紙漉きなど)
- ・「総合歴史研究」講座(小川町の歴史探究、フィールドワークなど)

おわりに ー今後の発展に向けてー

- 見えてきたこと
 - ・「つなぐ(つながる)」ことの大切さと難しさ
- 持続可能な体制づくり
 - ・地域と学校をつなぐ「総合的な探究の時間」、人材バンクの創設
- 埼玉県教育委員会の事業との連携
 - ・「学校・地域WIN・WINプロジェクト」「小川学」
- 小川町との連携の深化
 - ・自治体の街づくり行政への参画

《県立小川高等学校成果発表資料》

**WIN・WINを目指す
学校と地域の連携**

小川高校「ふるさと創生プロジェクト」
の取り組み

はじめに ー取組の背景ー

○生徒募集の推移

H25年度入試 受検者252名(1.06)
 H26年度入試 受検者213名(0.89)欠員補充
 H27年度入試 受検者235名(0.98)欠員補充
 H28年度入試 受検者211名(1.06)5クラス募集
 H29年度入試 受検者208名(1.05)5クラス募集
 H30年度入試 受検者207名(1.04)5クラス募集

はじめに ー取組の背景ー

○小川の地域性

- ・比企、小川地域は、歴史と伝統のある地域
- ・地域社会が安定しており、家庭と地域のつながりがある
- ・少子高齢化、人口減少
2010年(32,193)、2020年(28,356)、2050年(14,294)
- ・有機農業、小川和紙など特性を生かした新たな動き
- ・小川町の「にぎわい創出課」による町の活性化
- ・立教大学の空間ゼミのように、地域の発展に向けた地道な実践活動
- ・NPO団体などにも地域を盛り上げようとする活動がある

ふるさと創生プロジェクト

(1)基本的な考え方

- ・これまでの取り組みの発展的継承
- ・地域の発展なくして学校の発展もない
→学校と地域の連携を通じて、学校も地域も活性化させたい
- ・学ぶ、発信する(提案する)、つなぐ(つながる)
→プロジェクトを通じて、地域の発展を担う人材を育成する

ふるさと創生プロジェクト

ふるさと創生プロジェクト

(2)小川町との連携

- ・小川町との連携協力に関する包括協定締結

ふるさと創生プロジェクト

今年度の主な取り組み 学ぶ、発信する、つなぐ

- ・第70回小川七夕まつり司会運営補助(放送部)
- ・『来て！観て！食べて』小川町食の魅力PR事業(生活美学部、放送部)
- ・小川和紙フェスティバル作品展示(書道部)
- ・小川和紙マラソン大会運営補助(放送部、陸上競技部、バレー部、剣道部)
- ・青ノトによる振り込め詐欺被害防止活動(放送部)
- ・駅・通学路周辺清掃(野球部、バレー部)

ふるさと創生プロジェクト

『来て！観て！食べて』小川町食の魅力PR事業

ふるさと創生プロジェクト

『来て！観て！食べて』小川町食の魅力PR事業
発信する



ふるさと創生プロジェクト

(3) 小中学校、施設等との連携 つながる

- ・小川小学校との交流事業(希望者有志30名ほど)
- ・樺台中学校合唱祭へ向けた指導(音楽部)
- ・樺台中学校立志式へ向けた発声指導(放送部)
- ・旧上野台中学校体育館の使用
- ・施設での出前発表会(音楽部)
- ・埼玉県立嵐山史跡の博物館でのボランティア
ティーチャー派遣(希望者有志5名ほど)

ふるさと創生プロジェクト

(4) 大学・短大との連携 学ぶ

- ・武蔵丘短期大学との連携協定の締結
健康生活学科 長島洋介先生による講演会
- ・東洋大学理工学部との連携協定の締結
2学年進学選抜クラスの生徒による大学見学
- ・立教大学コミュニティ福祉学部空閑教授のゼミ生との交流
小川町木呂子地区をフィールドに「中山間地域ふるさと事業調査研究」、竹沢地区「ふるさと支援隊」事業
- ・新潟大学農学部 粟生田忠雄先生
進学選抜クラスを対象とした講演会

ふるさと創生プロジェクト

(5) 総合的な学習の時間の活用(「くらしと科学」)

学年	月	日	時間	内容
第1期	10/13	木	2時間	(小) 地域に伝わる文化の継承(お祭り)
	11/5	木	1時間	地域の歴史
第2期	11/12	木	2時間	実習(1) 種ひき
	11/19	木	1時間	(小) 地域の歴史
第3期	11/19	木	2時間	実習(2) ちりとり、種打ち
	12/2	木	1時間	(小) 地域の歴史
第4期	11/26	木	2時間	実習(3) 大塚での 稲刈
	12/3	木	1時間	実習(4)
第5期	12/3	木	2時間	実習(5) 稲刈のノートづくり
	12/10	木	1時間	実習(6)
計				18時間

ふるさと創生プロジェクト

(5) 総合的な学習の時間(「くらしと科学」) 学ぶ



おわりに - 今後の発展に向けて -

- 見えてきたこと
 - ・「つなぐ(つながる)」ことの大切さと難しさ
- 持続可能な体制づくり
 - ・地域と学校をつなぐ「総合的な探究の時間」
 - ・人材バンクの創設
- 埼玉県教育委員会の事業との連携
 - ・学校、地域WIN-WINプロジェクト
 - ・小川学
- 小川町との連携の深化
 - ・自治体の街づくり行政への参画

(2) 地域に愛される学校を目指して

本庄第一高等学校教頭 山浦秀一

1 学校紹介

- ・沿革と規模
- ・学園理念
- ・2015 教育宣言 創立 100 周年に向けて
- ・2019 学校改革 教育宣言の具現化
地域との連携強化の必要性
- ・進学実績、部活動実績

2 地域連携の実践例

- ・ボランティア部 綿菓子機を携えて校外に
- ・パソコン部 外に出るパソコン部
- ・美術部 絵画教室、オブジェ作製、神社修復、壁画制作
- ・ダンス部 地域のお祭り、ダンス教室
- ・チアリーディング部 地域のお祭り、企業の行事
(企画の中心を担う)
- ・書道部 企業式典、地域イベント、TV

出演、高い実績による宣伝効果

3 高大連携実践例

- ・武蔵丘短期大学との連携協定締結
- ・群馬医療福祉大学との連携協定締結
- ・東京福祉大学への高大連携講座参加

4 まとめ

- ・地域連携—企業をはじめ地域とのかかわりが増えた理由
- ・高大連携—まだ、始めたばかり
地域創生のための三者連携の可能性、互恵的関係づくり

《本庄第一高等学校成果発表資料》

Challenge to Change

地域に愛される学校を目指して



本庄第一高等学校

Challenge to Change

本日の内容

- 1 学校紹介
- 2 地域連携実践例
- 3 高大連携実践例
- 4 まとめ

Challenge to Change

1 学校紹介

沿革と規模

大正14年6月4日塩原裁縫女学校～本庄女子高等学校
 平成5年共学化 本庄第一高等学校と校名変更
 平成28年本庄第一中学校開校
 創立93年目
 生徒数1年369名 2年473名 3年401名 合計1243名
 S特進・特進・α・βの4コース

Challenge to Change

1 学校紹介

学園理念
「響生」

影響を受け、影響を与え、柔軟さと豊かさを育む。

本校の生徒と教師・職員は、目的達成のため、
お互いに響きあい、前進し、活力ある学園を築きます。

Challenge to Change

1 学校紹介

2015教育宣言 ～2025創立100周年に向けて～

- 1 響きあう教育
・豊かな人間関係
- 2 躍進しつづける教育
・ICT教育 大学入試改革への対応 先進的な教育
- 3 あきらめない教育
・ともに歩み続ける信頼関係

Challenge to Change

1 学校紹介

2019年 新しい本庄第一がはじまる

Challenge to Change

新教育システムスタート

Challenge to Change

1 学校紹介

学校改革 ～教育宣言の具現化～

- 1 コース改編
4コースから3コースへ 次学年進級時に移動可能
文武両道 各コース時間割の終わりを揃える
- 2 ICT教育
非常勤講師を含め全教員にタブレット配布
グループウェア「デジキャン」による連絡
全館Wi-Fi工事
平成31年度入学生よりクロームブック購入
- 3 地域連携強化
本庄ロータリークラブへの加入
こだま青年会議所(YC)への教員派遣
部活動を中心とした地域催事への協力

Challenge to Change

1 学校紹介

進学実績 (過去5年間合格者数)

	5年間累計	5年間平均
国立大学	92	18.4
公立大学	57	11.4
準大学	7	1.4
早慶上理	168	33.6
G M A R C H	477	95.4
成成獨國武	218	43.6
日東駒専	468	93.6

地域づくりの大きなポイントになっていくものと考えている。」

○山浦教頭（本庄第一高校）

「私立高校は公的機関ではないので、県や市町村などの行政機関との係わりは難しい部分がある。従って、これからは一企業として、近隣企業等との連携が重要になってくるのではないかと考えている。」

(2) 地域連携、高大連携に期待すること

○司会

「各学校から、高大連携に期待すること、大学等と高等学校における教育連携の在り方と展望についてご質問、ご意見を承りたい。」

○武藤校長（児玉高校）

「本校は女子栄養大学と連携協定を結ばせていただいているが、実際のところ、学校自体が本県の端っこに位置しているため、大学と距離があり過ぎ思うような連携が図れていない。小川高校さんの発表を聞かせていただいたが、本校が位置する旧児玉町が本庄市と合併したことで、地域との係わりをどう深めていくかが課題である。このような高校でもスムーズに連携が図れる方法を考えていただけるとありがたい。」

○司会

「武藤校長先生には、昨年度この研究協議会で発表いただいた。その際も、同様の課題を指摘されていたが、本日、ご出席の校長先生方の中で、本校ではこんな方法でうまく連携が図れているとか、或いは、大学等との連携は全く行っていないので、良い方法があれば是非聞いてみたいという方があればお受けしたいがいかがか。」

○小野塚校長（三郷北高校）

「本校は、埼玉県一早く日が昇る学校で県の最も東の端にある。県内に限れば、生徒募集の範囲が60度しかなく、募集には苦労している。昨年度から地元三郷市内小中学校との連携を進めている。近くに大学等がないので、高大連携については考えてこなかった。生徒の学力向上や授業の質向上、教員の授業力向上に向け高大連携により、何がどう生かせるのかお聞きしたい。」

○司会

「本学においても教員の授業力向上のための研修は定期的に実施している。本年度は、教育センターにお願いして指導主事を派遣していただき、本学学生を相手にアクティブラーニング手法の授業を実施、教員の研修会とした。こうした研修内容を高校の先生方におろしていくことは可能ではないか。」

○猪野校長（熊谷工業高校）

「高大連携では、生徒、教員対象の内容ばかりではなく、保護者を対象とした内容のもので有意義だ。本校ではPTA行事で料理教室やスイーツ作りに人気があり、こちらの短大にお願いして、つい先日、弁当作りの調理教室を実施した。こちらの申し出を快くお引き受けいただき、30名ほどの保護者が参加したが大変好評であった。保護者の満足度は他のどんな行事よりも高かった。来年度も是非お願いしたいと思っている。保護者も学べるムサタンを目指してほしい。」



○司会

「猪野校長先生からは大変有難いご報告をいただいた。この短大は小さな短大ではあるが、健康・スポーツ・栄養に特化した稀有な存在である。特にスポーツ栄養に関しては、優秀なスタッフがそろっているので、ご希望があれば遠慮なくご連絡いただきたい。」

○高野校長（寄居城北高校）

「本校は、地域の理解を得て大変人気のある高校になっている。生徒の進学割合は、進学6割、就職4割という現状。こちらにも現在4名の卒業生がお世話になっている。連携協定の一環で、陸上の辻先生にも定期的にご指導いただいている。現在、こちらの短大では県内5つの高校と関係協定を結ばれていると伺っているが、

大変虫のいい話になるが一つ要望させていただきたい。こちらにはほぼ毎年進学希望者が有るが、中には指定校推薦で決まった生徒が経済的理由で進学を辞退したケースがある。せっかくの連携なので、入学に際し、連携校ならではの特段の配慮をしてもらうことはできないか。そういうものがあれば、生徒の進学意欲をかきたてることにもなり、高校での大学等への進学に向けた指導にも生き、短大の広報にもつながると思うがいかがか。そういった取り組みを是非検討していただきたい。」

○川合学長

「大変貴重なご要望をいただいた。高大連携では、短大のマンパワーを駆使して、特に健康・栄養・スポーツの分野で学問的な交流を進めていきたい。学習意欲の高い生徒には、例えば高校生のうちから短大の授業を受講してもらって入学した際には単位として認めるなどの単位認定制度についても検討している。高校からの推薦があれば、入学金を免除してでも入学していただく。法人本部の理事会でも私から提案させていただいている。是非、来年度からでも実施したいと考えている。」

○後藤理事長

「学長から強い意見がでていたので、私自身、首を真ん中くらいまでふっている。大変重要な課題であると認識している。」

(関連して、本学の新奨学制度について

太田教授より説明を行う。)



○小林校長 (久喜北陽高校)

「本校では特に高大連携は行っていない。特に今、学校現場では部活動の在り方が問われている。専門外の先生方に対しても効果的な指導

法等について講義等お願いできればと思っている。」

○小曾戸教頭 (大宮東高校)

「本校では、平成28年度から女子栄養大学、平成29年度から平成国際大学と協定を結んでいる。体育科のある学校で、部活動加入率は96%と極めて高い。女子栄養大学には継続的に生徒の栄養指導をお願いしている。平成国際大学とは、最新のトレーニング指導、本校文化祭への大学ブース出展、体力測定、また、生徒が大学へ行って講義を受けるなどの取り組みがある。生徒の進路意識の啓発には大きなメリットがある。」

○加藤校長 (浦和南高校)

「直接、高大連携とは関係しない内容となるかもしれないが、良い機会なので発言させていただく。今、学校のスポーツ文化があやぶまれている。特に高校の部活動では、選手育成や勝利至上主義に偏り過ぎてはいないか。生徒の次のステップのためのバックアップが忘れられてはいないかと常々疑問を抱いている。高校で部活動に邁進して、アスリートとして成功すればいいが、ほとんどの生徒はそうはならない。そこで、本校ではスポーツを通じて、社会に出て能力を発揮できるための取り組みを始めた。高校の部活動も勝利主義だけでなく、セカンドキャリアを考えさせる方法や取り組みに力を注ぐべきである。つまり、部活動を通じた社会で通用する能力の育成が必要ということである。お願いしたいことは、大学の専門的教育力、指導力を高校におろしていただき、継続的にスポーツを通じた生徒の能力育成に支援してほしいこと。高校のスポーツ文化の再構築のためにも、是非ご協力をお願いしたい。」

○司会

「大変貴重なご意見をいただいた。本学でも運動部学生のセカンドキャリアについて、十分な指導を行っている。一例として、女子バレーボール部の杉山教授に少し説明していただく。」

○杉山教授

「強化指定クラブとして活動させていただいている。女子バレーボール部は短期大学ながら、

現在関東大学2部リーグに所属している。パナソニックなど実業団への就職する者が4名、他に保健体育教員を目指している者、栄養士の資格を持ち、バレーで培ったものを生かして就職するなど、資格を取得させ、社会で即通用する学生の指導を心掛けている。」

○司会

「大変貴重なご意見をいただいた。高大連携、地域連携の話題から、運動部生徒のセカンドキャリアに関する問題まで、多岐にわたる意見交換が行えた。高大連携、高大接続における様々な課題について、まだまだ協議を重ねたいところであるが、時間の制約もあるので、この辺で協議を終了させていただく。何かあれば、終了後、個々にお受けするので、申し出ていただきたい。今後とも、高大連携についてよろしくお願ひしたい。」



5 指導講評

文部科学省高等教育局大学振興課課長補佐

八島 崇 氏

本日はこのような研究協議の場にお招きいただきありがとうございます。

埼玉県内の公・私立 50 校ほどの校長先生方がお集まりということで、大学・短大等への進学を目指す生徒の多い学校もあれば、卒業してすぐ就職という生徒の多い学校もあろうかと思ひます。そうした中で、一概に講評といひましても大変難しいところもござひます。ただ一つ言えることは、本来ならば、県の教育委員会等が高等学校のリーダーである校長先生方に集まっただき、こうした高大連携に係る研究協議会を開催すべきところではないかと思ひわけでありまひますが、それをここ武蔵丘短期大学さんが中心となつて開催してらっしやるといふことに

対して、まずもつて敬意を表したいと思ひます。

さて、本日は約 40 頁ほどの資料を用意させていただきました。すべて説明するというわけにはいきまひませんが、あえて高大接続という点に絞つて説明させていただきます。

資料の 33 頁をお開きください。左下は埼玉県における大学等の現状を表した資料になっておりますが、4 年制大学の数、設置されている学部の種類、所在地等を見ましても、県の西部、東部地区に集中していることがおわかりいただけるかと思ひます。

また、特徴的なところは、進学者に関しては、他からの流入者よりも流出者が上回っているということです。現在、中教審将来構想部会では 2040 年問題を踏まえて、様々な検討がなされておりますが、30 頁をご覧くださいますと、この頁は、大学等が産業界や自治体と手を組み、地域創生のためのプラットフォーム作りに取り組み、地域ごとの大学進学率や進学者数の将来推計をしていこうというものを表している図になっております。

‘2040’ とは、今年生まれた子供たちが 22 歳になった時、どのような社会状況になっているのか、それを踏まえて、高等教育はどうなっていくべきかという未来予想図を描いているわけだす。そして、国としては、今までオールジャパン的に大学等がどれくらい必要かという議論を重ねてきたわけだすが、これからは、都道府県レベルで、つまり埼玉県であれば、オール埼玉で何が必要かといふことを考えていく上で、プラットフォーム化を推進していこうとしているわけだす。

また、31 頁の下段は、大学等における学習成果の可視化に向けた改革の状況を示した資料となります。学生自身が、自分がどこまで力があるのかといふことを大学側が的確に評価して、講義等に役立てようとするものだす。

次に奨学金についてだすが、15 頁をお開きください。まず、両親の年収が子どもの進学率にどう影響しているかを表したグラフだすが、当たり前のことかもしれませんが、両親の年収が高ければ子どもの進学率も高いわけだす。また、学歴別生涯賃金を見ましても、大卒と高卒とでは約 7 千万円ほどの差がござひます。さらに失業率を見ましても、学歴が上がるほど失業率は下がりますし、所得と大学進学率

には如実な相関があることが見てとれると思います。

そして、22 頁には、支援対象者の要件、支援問題。その最大の要因が子育てや教育にお金がかかり過ぎるという点にあるということ。さらに、どの子育て段階で最もお金がかかるかという問いに対しては、やはり高校卒業後の大学等への進学にお金がかかるという回答が半数以上であり、これらを見ますと、少子化対策のためには、高等教育段階の教育費負担軽減が不可欠であると言えます。

続いて 17 頁は、高等教育段階における教育費の負担軽減策の現況を示したのですが、全学生の 4 割が授業料減免や奨学金制度など何らかの支援を受けていることがわかります。こうした支援策だけでは、まだまだ不十分なところが多々ありますので、そこで新たな施策として 19 頁にお示ししているのが、消費税 10% へというところの財源をもって、大学等、あるいは専門学校への進学者に対し、特に低所得世帯でほんとうに支援が必要な学生に対して高等教育費の無償化を図っていこうとするものです。この施策の方向性としましては、貧困の連鎖を断ち切り、格差の固定化を防ぐというもので、非課税世帯及びそれに準ずるすべての世帯の学生を全員対象とするということです。

20～21 頁は、こうした対象となる学生に対しては、親の年収の段階に応じて、入学金、授業料を免除していくとともに、給付型奨学金も段階に応じ

て支援していくことを示した資料となります。

措置の対象となる大学等の要件が示されています。先程来、校長先生方から武蔵丘短期大学に対して、減免や奨学金に関する質問が出ておりましたが、国といたしましても、非課税世帯、それに準ずる学生に対しては全員を対象に返還不要の奨学金、また、入学金、授業料免除等の措置を考えているところを是非ご理解いただければと思います。これは、現高校 2 年生から対象となる制度であり、3 年生も大学・短大の 2 年生になった時にはすべて対象となる大変大きな制度改正です。

また、24 頁には、高等学校の現場から、わかりづらいくちご指摘いただくことの多い奨学金制度について理解を促進するためのスカラシップ・アドバイザー制度についてお知らせする資料となっております。高等学校からの要請に応じて、アドバイザーを派遣する制度ですが、謝金も交通費も一切高校サイドの負担はございませんので、是非、積極的に活用していただければと思います。大変、かけ足での資料説明となりましたが、高校生にとっての大学等進学に係る減免制度や奨学金制度についての情報提供をさせていただきました。

以上をもちまして、私からの説明を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(文部科学省提供資料は紙面の都合上省略)

IV アンケート集計結果

◎ 第 1 回教育連携事業成果報告会並びに研究協議会アンケート集計結果 (回答率 38/39 97.4%)

1 第 1 回教育連携事業成果報告会並びに研究協議会について

(1) 内容について

ア 参考になった 38 名 (100.0%)	イ あまり参考にならなかった 0 名 (0.0%)
------------------------	---------------------------

(2) 実施時期について

ア 概ね良い 36 名 (94.7%)	イ 検討を要する 2 名 (5.3%)
---------------------	---------------------

(3) 上記 (2) で「イ」と回答された方に伺います。いつ頃の時期がよろしいですか。

ア 6～7月 0 名 (0.0%)	イ 8～9月 1 名 (50.0%)
ウ 10～11月 1 名 (50.0%)	エ 1～2月 0 名 (0.0%)

2 貴校における大学等との連携について

(1) 大学等と高大連携協定を締結されていますか。

ア 締結している 19 名 (50.0%)	イ 締結していない 19 名 (50.0%)
-----------------------	------------------------

- (2) 上記 (1) で「ア」と回答された方に伺います。差し支えなければ大学名等を記入してください。また、実施された連携事業の内容について簡単に記入してください。(複数回答)

【大学名等】

武蔵丘短期 (4)、女子栄養 (10)、文京学院 (1)、大東文化 (2)、尚美学園 (1)
城西 (1)、埼玉工業 (6)、ものづくり (3)、日本工業 (1)、成城 (1)、東洋 (1)
高崎商科 (1)、東京国際 (1)、日本医療科学 (1)、武蔵野学院 (1)、国際学院 (1)

【連携事業の概要】

大学等からの講師派遣・出前授業、大学等の施設利用 (部活動関係)、授業連携、PTA 研修
高校生の資格取得、高校生のインターンシップの場

- (3) 上記 (1) で「イ」と回答された方に伺います。今後、大学等との連携協定を締結する予定がありますか。

ア ある	2名 (10.5%)	イ 全く考えていない	2名 (10.5%)
ウ 検討してみたい	15名 (78.9%)		

- (4) 上記 (3) で「ア」と回答された方に伺います。差し支えなければ大学名等を記入してください。

【駿河台、日本】

- (5) 上記 (3) で「ウ」と回答された方に伺います。連携協定を締結してみたいと思われる大学等 (本学を含めて) がありますか。差し支えなければ大学名等を記入してください。(複数回答)

【武蔵丘短期 (4)、女子栄養 (1)、聖学院 (1)、大東文化 (1)、埼玉女子短期 (1)】

- 3 高大連携において期待されることは何ですか。(自由記述)

- ・生徒の大学等への進学意識の醸成 (7)
 - ・大学等の専門的知識・技能等を活用した視野拡大 (6)
 - ・高大の教育情報交換の場として、教員の指導力向上に活用 (3)
 - ・生徒の「深い学び」「学びの楽しさ」等を知る体験の場 (3)
 - ・進学に対する生徒の学習意欲、保護者の意識啓発を促す連携事業の実施 (2)
 - ・キャリア教育の推進 (3)
 - ・高校教員の意識改革 (6)
 - ・高大相互の教育力向上
 - ・保護者の学びの場 (1)
 - ・生徒の学習支援 (1)
 - ・運動部活動の支援 (2)
 - ・講演・出前授業の実施 (2)
 - ・単位相互認定制度の確立 (1)
 - ・TV授業の配信 (1)
 - ・ソーシャルスキルアップのための講義 (1)
 - ・推薦入学枠の拡大、授業料免除 (1)
- 《その他の意見として》
- ・連携協定を締結したものの、何も実施できていない。(3)
 - ・高校では管理職が代わると連携が滞ってしまう。校内の体制整備が必要 (2)
 - ・無理なく、長期的に継続できることが重要である。(1)
 - ・何ができるか、相互に意見を出し合える大学等を期待する。(1)
 - ・特別支援学校の状況を理解してもらえる大学等を開拓したい。(1)

- ◎ 第2回教育連携事業成果報告会並びに研究協議会アンケート集計結果 (回答率 45/49 91.8%)

- 1 第1回教育連携事業成果報告会並びに研究協議会について

- (1) 内容について

ア 参考になった	45名 (100.0%)	イ あまり参考にならなかった	0名 (0.0%)
----------	--------------	----------------	-----------

- (2) 実施時期について

ア 概ね良い	44名 (97.8%)	イ 検討を要する	1名 (2.2%)
--------	-------------	----------	-----------

- (3) 上記 (2) で「イ」と回答された方に伺います。いつ頃の時期がよろしいですか。

ア 6～7月	0名 (0.0%)	イ 8～9月	0名 (0.0%)
ウ 10～11月	1名 (100.0%)	エ 1～2月	0名 (0.0%)

2 貴校における大学等との連携について

(1) 大学等と高大連携協定を締結されていますか。

ア 締結している 25名 (55.6%)	イ 締結していない 20名 (44.4%)
----------------------	-----------------------

(2) 上記 (1) で「ア」と回答された方に伺います。差し支えなければ大学名等を記入してください。また、実施された連携事業の内容について下記の回答群から該当するものをお答えください。

(複数回答)

【大学名等】

武蔵丘短期 (4)、女子栄養 (7)、文京学院 (1)、大東文化 (1)、尚美学園 (1)
 城西 (1)、埼玉工業 (5)、ものづくり (1)、日本工業 (2)、独協 (1)、東洋 (1)
 高崎商科 (1)、東京成徳 (1)、群馬医療科学 (1)、武蔵野学院 (2)、東京福祉 (1)
 産業能率 (1)、千葉商科 (1)、浦和 (1)、平成国際 (1)、秋草短期 (1)

【実施している連携事業内容】

ア 大学等からの講師派遣・出前授業 17名 (37.8%)
 イ 高校生の大学等の授業への参加 11名 (24.4%)
 ウ 部活動生徒の体力測定等 4名 (8.9%) エ 部活動生徒の技能指導 4名 (8.9%)
 オ 高校生の資格取得のための講座受講 2名 (4.4%)
 カ 高校生のインターンシップの場 1名 (2.2%) キ PTA研修 8名 (17.8%)
 ク 大学の施設利用 6名 (13.3%)
 ケ 入学試験、入学時の特別配慮 (入学金免除、特待制度等) 4名 (8.9%)
 コ その他 1名 (2.2%) (アクティブラーニング研修会)

(3) 上記 (1) で「イ」と回答された方に伺います。今後、大学等との連携協定を締結する予定がありますか。

ア ある 2名 (10.0%)	イ 全く考えていない 5名 (25.0%)
ウ 検討してみたい 13名 (65.0%)	

(4) 上記 (3) で「ア」と回答された方に伺います。差し支えなければ大学名等を記入してください。

【駿河台、武蔵野短期】

(5) 上記 (3) で「ウ」と回答された方に伺います。連携協定を締結してみたいと思われる大学等 (本学を含めて) がありますか。差し支えなければ大学名等を記入してください。(複数回答)

【武蔵丘短期 (2)、女子栄養 (1) 文教 (1)、大東文化 (1)、平成国際 (1)、早稲田 (1)】

3 高大連携において期待されることは何ですか。該当するものをお答えください。(自由記述)

ア 大学等からの講師派遣・出前授業 38名 (84.4%)
イ 高校生の大学等の授業への参加 30名 (66.7%)
ウ 部活動生徒の体力測定等 12名 (26.7%) エ 部活動生徒の技能指導 22名 (48.9%)
オ 高校生の資格取得のための講座受講 12名 (26.7%)
カ 高校生のインターンシップの場 7名 (15.6%) キ PTA研修 21名 (46.7%)
ク 大学の施設利用 19名 (42.2%)
ケ 入学試験、入学時の特別配慮 (入学金免除、特待制度等) 10名 (22.2%)
コ その他
・生徒の学力向上、教員の授業力向上に資する総合的な連携
・生徒の大学等進学意識の醸成、保護者の進学意識啓発につながる連携
・大学等の高レベルの知識・技能の習得が図れる内容
・大学生による高校生の授業サポート (学力向上を期して)

V まとめ

本協議会において、第1回では県立北本高校、県立ふじみ野高校、県立児玉高校の3校から、また、第2回では県立小川高校、本庄第一高校の2校の高大連携・地域連携に係る取り組み事例とその成果報告から、地域、高校、大学・短大等双方にとって、高大連携・地域連携の意義、有効性を改めて認識することができた。

特に高大連携は、高校生に早期に大学・短大への進学を意識させ、進路選択の材料を与える絶好の機会となるだけでなく、将来を見通した時、企業等が求める人材のニーズをより多く把握している大学・短大で、その教育内容に触れ、社会で求められる能力を高校生段階から身に付けさせることができれば高校生のキャリア形成の上で非常に意義深いものとなる。

近年、大学・短大の存在意義として、「研究・教育」に加え「地域貢献」が大きなウエートを占めるようになってきた。従って、大学・短大は高大連携が単なる学生確保のための一手段にとどまることなく、高大連携を大学・短大の地域貢献の代表的取組の一つと捉え、広く地域に門戸を開放し、より緊密な連携関係を構築していくことが重要である。

今、18歳人口の減少に直面し、大学・短大はその生き残りをかけ、より独自色のある研究・教育を進め、いかに地域に発信していくことができるかが強く求められる時代である。

本学は、その特色ある教育力を生かし、地域住民対象に健康体力測定や健康運動教室の開設、健康料理教室や高齢者の栄養指導など「健康」「栄養」「スポーツ」に関わる様々な取り組みをもって地域に貢献してきた。

今後も地域連携、高大連携を通じて地域に貢献しより地域に密着した「必要とされる短大」を目指していく。

VI 謝辞

教育連携事業成果報告会並びに研究協議会の開催に当たり、第1回では、埼玉県立北本高等学校の高橋和弘校長先生、埼玉県立ふじみ野高等学校の大川勝校長先生、埼玉県立児玉高等学校の武藤正校長先生、第2回では、埼玉県立小川高等学校の葦塚

雄一校長先生、埼玉県本庄第一高等学校の山浦秀一教頭先生から、それぞれ各校の特色ある取り組みをご発表いただき誠にありがとうございました。また、公務ご多忙の中、本会にご出席を賜りました多くの校長先生方に心より感謝申し上げます。

そして、文部科学省からは、高等教育局大学振興課短期大学係長 齊藤正信様(第1回)、高等教育局大学振興課課長補佐 八島 崇様(第2回)にそれぞれお越しいたごき、指導講評並びに文部科学省からの貴重な資料提供を賜りましたことあらためて感謝申し上げます。